



2013 年度 海外交換留学派遣生 留学報告書

Study Abroad Annual Report 2013

お茶の水女子大学グローバル教育センター

交換留学派遣生 留学報告書の発刊にあたって

お茶の水女子大学は、世界各国の大学と交流協定をもち、これらの協定大学に、毎年意欲ある優秀な学生を派遣しています。お茶の水女子大学グローバル教育センターは、学生の長期・短期の留学支援、海外からの本学に留学する学生の支援、海外の大学との協定締結といった業務を中心に、一貫して、お茶大のグローバル化促進の業務を担ってきました。

中でも、協定大学への交換留学派遣プログラムは、半年または1年という長期にわたり留学ができること、本学に在籍する学生であれば、本学が協定をもつ世界有数の協定大学に授業料免除で長期の留学が可能になり、語学のみならず着実な勉学の成果が得られること、実際に海外での長期滞在を経験して、さまざまな経験ができることなどが魅力として挙げられます。先日も、数年前に交換留学派遣を経験したある卒業生から、留学が「広い世界を見て自分を振り返る素晴らしい機会」であったと聞きました。海外での新鮮な体験から多くのことを学ぶチャンスとしてもっともっと多くの学生にこの制度を活用して、長期留学を実現してほしいと願っています。1人でも多くのお茶大生を交換留学で派遣するためには、多くの協定大学が必要となりますが、グローバル教育センターでは、新たに協定を締結して相互に交流をはかる協定大学を増やすことにもエネルギーを注いでいます。2014年度の協定大学総数は61大学で、この規模の大学としてはとても多い数であるといえます。

2014年度の交換留学派遣プログラムでは、合計37名が海外の21大学に派遣されました。大学在学中に留学をする学生は、早い時期から綿密な計画を練ることが必要とされます。たとえば、実質的にお茶大を1年間離れることで、事前にどのような利点や知っておくべきリスクがあるのか等を調べ、帰国しお茶大に復学した後のことも計画しなくてはなりません。また、学内の審査に向けて、自分の研究計画をしっかりとみつめ、どのような勉強をしたいか、何に興味があるのかを精査することも重要です。派遣が決定したら、大学とのやりとりをはじめ、現地の様子を具体的に把握して渡航の準備をすることになります。それぞれの段階は決して楽でも簡単でもありませんが、グローバル教育センターに留学相談に訪れる学生が、留学の準備をする過程で自分のやりたいことを真摯にみつめ、みるみるうちに成長してゆくことが手にとるようにわかります。そして1年後、さまざまな経験をして帰国し、さらに成長した姿を見せてくれるのはほんとうにうれしいことです。

本報告からも、2014年度交換留学派遣プログラムがたいへん充実したものであったことがわかりいただけることと思います。今年度から4学期制も導入され、学生のみなさんのスケジュールは、6月から9月の夏の期間を海外で過ごすことが以前よりずっと容易になりました。在学中にぜひ1度は海外で留学および異文化体験を経験して、いっそうグローバルな視野をもてる人に成長してほしいと願っています。

グローバル教育センター長

戸谷 陽子

CONTENTS 交換留学派遣生 留学報告書 2013

WHO?

2013 年度交換留学派遣生

WHEN?

交換留学プロセス

WHERE?

交換留学派遣協定校

HOW?

留學生活の過ごし方、楽しみ方：2013 年度帰国後アンケートより

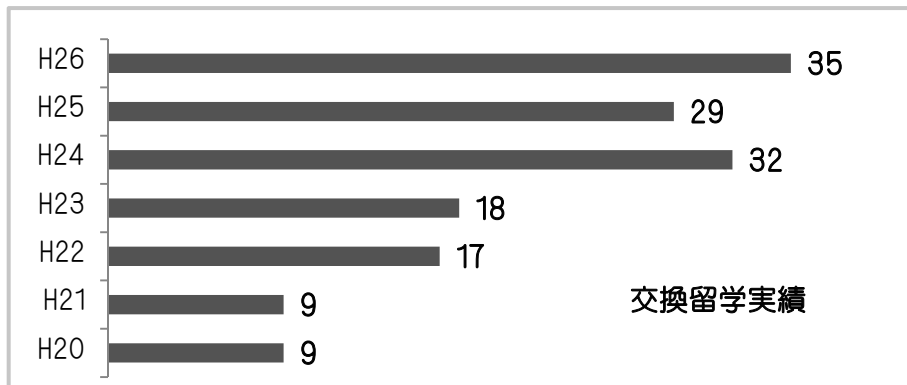
WHAT?

2013 年度交換留学派遣生 留学報告書

新井佑理
石丸稚菜
井上佳苗
岩田明子
牛留早亜彩
小野亜美
柿平恵理
笠 智遥
加藤絵里子
加藤紗妃

猿田静木
鈴木晴絵
田代恵理子
奈良香織
福永桃子
馬渕茉衣
三上奈津美
吉村 茜
劉 月晴
須田春香

2013 年度 大学間交流協定に基づく派遣学生



(イギリス)	(アメリカ)
マンチェスター大学	ヴァッサー大学
井上佳苗	小野亜美
マンチェスター大学	ヴァッサー大学
柿平恵理	鈴木晴絵
マンチェスター大学	南オレゴン大学
馬淵茉衣	岩田明子
ロンドン大学	(オーストラリア)
笠 智遥	ニューサウスウェールズ大学
ロンドン大学	新井佑理
加藤絵里子	ニューサウスウェールズ大学
(トルコ)	石丸稚菜
アンカラ大学	ニューサウスウェールズ大学
福永桃子	牛留早亜彩
(ドイツ)	ニューサウスウェールズ大学
ケルン大学	三谷菜穂美
田代恵理子	モナシュ大学
バーギシェ・ブッパタール大学	奈良香織
大橋苑佳	(ニュージーランド)
(イタリア)	オタゴ大学
‘サピエンツァ’ ローマ大学	三上奈津美
山川亜梨紗	オタゴ大学
(チェコ)	吉村 茜
カレル大学	(タイ)
加藤紗妃	タマサート大学
(スウェーデン)	池田亜柊
リンショーピン大学	(台湾)
浦田雅子	国立台湾大学
(フィンランド)	須田春香
セントリア先端科学大学	(韓国)
劉 月晴	梨花女子大学校
タンペレ大学	三次好華
猿田静木	(中国)
(ポーランド)	北京外国語大学
ワルシャワ大学	船木円香
池田亜柊	
ワルシャワ大学	
三次好華	

交換留学プロセス

留学
準備

4 月

留学説明会

5～9 月

情報集め・語学力アップ

10 月

**留学説明会
募集開始**

10 月末頃

応募締切

11 月～

学内選考

2～4 月

学内内定/協定校申請

5～6 月

事前研修

「異文化」や「危機管理」についての
指導（渡航前 4～5 回実施）

留学
開始

8 月

アジア・米国・欧州出発

◆オセアニアは翌年 1～2 月出発

帰国

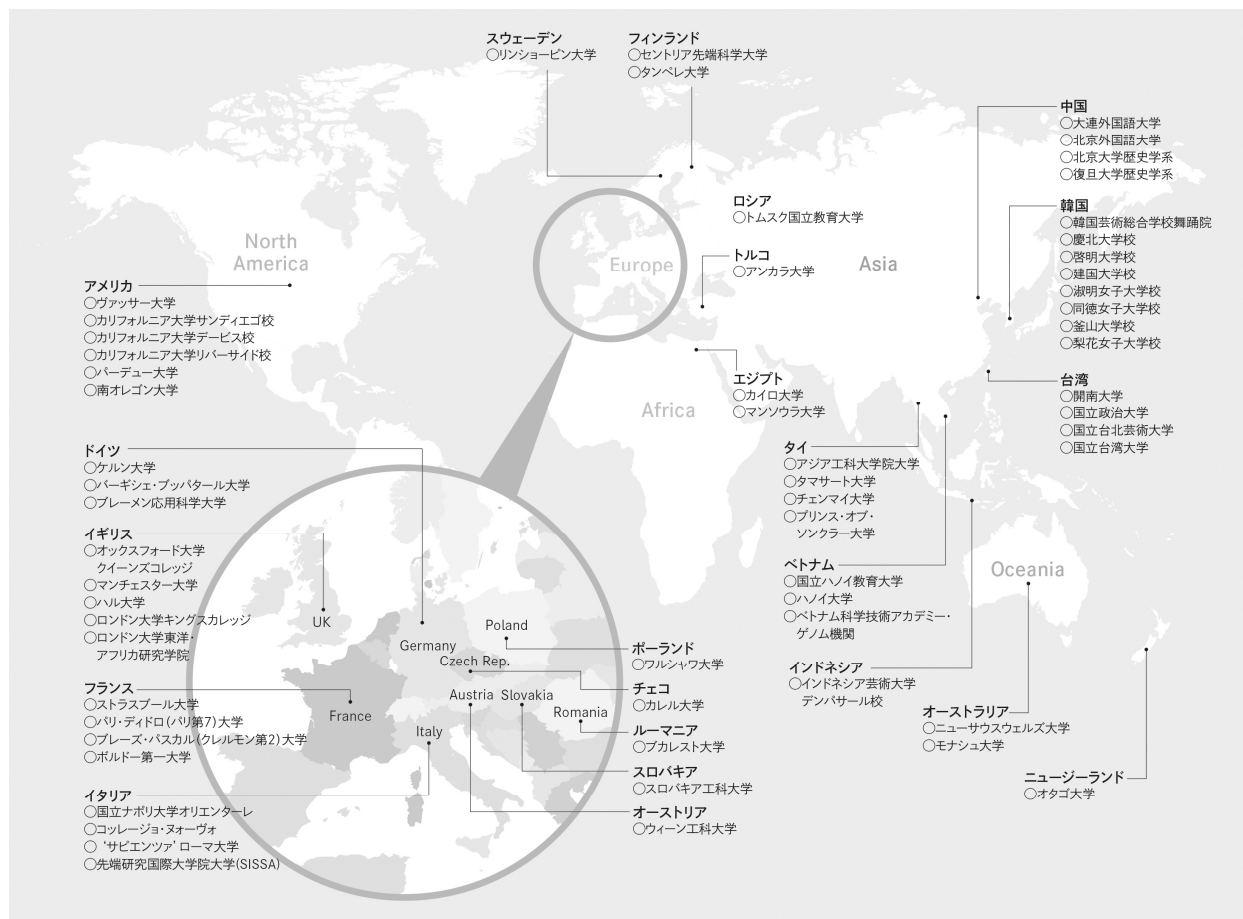
10 月

**帰国報告会/
留学経験者相談コーナー**

◆派遣留学生在それぞれの留学先のエリア
を中心に、留学に関する疑問や悩みの質問
に答えます。

大学間学生交流協定一覧（部局間協定を含む）

※2014年10月1日現在



留学生生活の過ごし方、楽しみ方

～帰国後のアンケートは将来交換留学を希望する学生への情報提供のみならず派遣生自身の留学の振り返り作業としても重要な過程としています。～

生活について

- ✚ 住居費は食事込みで約8万円/月。生活費は大体2万円/月(マンチェスター)
- ✚ 生活費(住居および食費込み)は約11万円/月。部屋にトイレ・洗面所・シャワーがあり、便利。(SOAS)
- ✚ 1学期(3か月)、寮費(食事付)で約35,700円。日本と気候が似ているが、防寒具は必要。住居費は、約53,000円。教科書代は約17,000円位。(オタゴ)
- ✚ 生活費(住居および食費込み)約10万円/月。とても寒くて5月でも雪が降っている。ヒートテックのズボンを持っていくと良い。(セントリア)
- ✚ 生活費は月約12～13万円位。UNSW Village(6人で1フラット、人数によって様々なタイプがある、大学所有ではないが大学内にある唯一の寮)。個人のスペースが確保されるのが大きな利点だが、その反面友達はできにくい。(UNSW)

学業について

- アンカラ大学の授業はほぼ全部トルコ語。留学前は独学と1ヶ月だけ週に1度の学校に行った程度。大学では半期トルコ語を受講。渡航先では独学だったが、結果として今はトルコ語での会話にはほぼ困らないくらいになった。(アンカラ)
- 留学中、Language Centreの英語クラスを受講(IELTS 6.5以上向けのAdvancedクラス)。CPE(ケンブリッジ英語検定)を指標とし、リスニング、スピーキングに重きを置いた授業で、ラジオを聴いて発表、Essayを書くことが多かった。(マンチェスター)
- 合唱の授業ではみなさんによくしてもらった。もっとフリートークできたら仲良くなれるのに…と悶々することも多々。Intertribal Danceは、少数精鋭でコミュニティの感じが体験できるおすすめのネイティブアメリカンの授業。(南オレゴン)
- 前期に指定の単位数を取っていたり、お茶大で同じような科目を履修していたりしないと受講できない授業があった。学部によっては制約が強いところもある。履修登録の際にお茶大の英文の成績証明書を持っていくと良い。(オタゴ)

留学生生活全般について

- すごく都会で、何でも揃っている。とても多文化なのでマイノリティとを感じる必要がなく居心地が良い。(マンチャスター)
- オーストラリアの多文化主義について学ぶことが目的のひとつだったため、現地での学習からは多くの気づきを得られた。また、多様な授業を受けて関心が広がった。(UNSW)
- シドニーは非常に多文化であるという印象を受けた。シティにも近く、大学から少し歩くと、とても賑やかなストリートがあったり、ビーチにも行くことができたり、とても住み心地が良い。(UNSW)

交換留学生に求められているもの

- ◇ 文系の授業では、特に日本人としての視点から私がどう考えているかを話すことを求められました。(ヴァッサー)
- ◇ 英語力などで高い期待はされていないので、授業に参加する積極性を見せること。せめて日本との比較で物事が言えるようにしておくこと。(マンチェスター)
- ◇ SOAS 自体、留学生が半分くらいの大学なので、留学生の位置づけは、現地の学生とほとんど変わらなかったと感じる。ゆえに、授業や議論でも対等に話すことを求められ、さらに自分の国や民族のバックグラウンドに基づいた視点や意見を求められることも多かった。(SOAS)
- ◇ 日本の教育のあり方や、英語第二言語話者としての意見を求められた。オーストラリアの教育を異なる角度から見るができる存在として意見を求められることが多かった。日本語教育では学生のサポーターとして精一杯活動することが求められた。(UNSW)

交換留学報告書

WHAT

マンチェスター大学

文教育学部 言語文化学科
グローバル文化学環 3年
井上佳苗

私は、2013年9月から2014年6月までの9ヵ月間、イギリスのマンチェスター大学へ交換留学にいきました。マンチェスターはイギリスで2か3番目に大きい都市で、あらゆる国から来た人々と賑わう多文化な街です。私がこの地への留学を決心した主な理由は、関心のある国際関係や移民問題を、多文化な環境を肌で感じながら勉強したいと思ったからです。実際、自分の好きな分野を学ぶことができ、様々な背景を持つ友達もできて、毎日が充実していました。私の留学先での経験をここにすべて書くことはできませんが、以下、大学での授業、寮での生活、その他の時間を通して私が感じたこと、学んだことを記していきたいと思います。

私は、大学で主に国際政治学と社会学の授業を履修しました。テロ対策やサイバーセキュリティ、メディア、イギリス社会についてなど、これまで学んだことのない分野を日本での授業とは異なる形で学ぶことができ、新鮮で世界が更に広がるようでした。授業は、先生の講義を聴くレクチャーと、チュートリアルという少人数で講義の復習や議論をするクラスに分かれています。私にとって、特にチュートリアルは苦労の連続でした。なぜなら、議論のために毎回大量の文献を読むことと、根拠のある意見を言うことを求められたからです。当初は文献を読んでも重点をつかめず、不慣れた英語でのディスカッションで周りの速さについていけなくて、自分には留学は向いていないのかもしれないと悩むこともありましたが、しかし、弱腰な自分を脱却したいと思い、少なくとも自分の意見を伝えようと毎回紙にまとめて臨み発言したところ、先生が良いところに気が付いたと褒めてくださったり、他の学生も私の意見を引用してくれたりして大変嬉しかったです。モチベーションを保ち続けることができたのは、留学生だからと区別されずに緊張感を持って授業に参加できたこと、そして、学ぶ意欲のある人を勇気づけてくれる先生、助け船を出してくれる他の学生がいたおかげだと思います。学問的知識を得られただけでなく、学ぶ姿勢をより主体的な方向へ変えることができた、有意義な経験でした。

留学生活で大きな割合を占めていたのが寮での生活でした。私の滞在していた寮は朝食と夕食がついていたので、毎日寮の友達と顔を合わせて食事をとることができて、寂しさを感じることもほとんどありませんでした。友達と一緒に料理を作ったり、アニメや映画を観たり、他愛のない会話をしたり、何気ない平和な毎日でしたが、このアットホームな寮生活のおかげで日本と異なる環境での生活も乗り越えることができたのだと思います。そして、イギリス以外から来ていた学生も多かったため、いろんな文化を知ることができ、また、いつも以上に他者への配慮に気を配ることができました。というのは、私の驚いたことに多くの友達が複雑な背景をもっていたため（たとえば、中国人とインドネシア人の両親を持つシンガポールからの友達や、イタリア人とコロンビア人の両親を持つイギリス人の友達など）、「どこの人だから

こういう文化を持つ」という先入観を壊しながら接しようと常に考えていたからです。宗教上の理由やベジタリアンであるために肉を食べることができない友達に対しても、一緒に料理をする際に肉の使用を避けるなど考えが回るようになりました。異なる文化を持つ友達でも、一緒に生活することを通して友情を深めることができたことは、私にとってかけがえのない宝物です。

大学の授業や寮生活以外でも、様々なことを経験し多くのことを学びました。たとえば、日本語を学ぶ学生に日本語を教え、英語を教えてもらうラングエッジエクスチェンジも私にとって大きな存在でした。相手は、アニメを通して独学で日本語を勉強したという学生であったり、日本語学科の学生であったりしましたが、私の知らない日本の社会問題について指摘されたり、日本の歴史や政治経済について意見を言われたりすることがあって、彼らの意識の高さに圧倒されると同時に、これまで自分は海外のことばかり学ぼうとしてきたが、他国と比較しながら日本について掘り下げて考えていかなければいけないと気づかされました。

また、あるときは旅先で、母語が英語でも私の知る英語とは相当異なるアクセントを持つ人と出会いました。相手の言葉が聞き取れず、自分の言うことも伝わらず「申し訳ない」と謝ったところ、「僕には僕の英語、君には君の英語があるから気にするな」と言われ、はっと気づきました。ここで出会う人々は皆違った英語を話す。私も自信を持って私らしい英語を話せばよいのだと。そこで、私はその人の言葉を理解できるまで聞き返し、伝わるまで言葉を変えて説明し続けました。少しの会話をするにも時間がかかりましたが、普段の会話よりも達成感とインパクトの強いコミュニケーションを楽しむことができました。

私は留学を通して、当初の目的だった興味のある分野を学ぶこと以上に、多くのことを得ることができました。新しい環境でこれまでにない経験をして考えが広がったことも、言語や文化の壁にぶつかって反省を繰り返しながら自分の能力や性格を見直すことができたことも、いろんな人に出会って様々な価値観を知ったことも、すべて私の血となり肉となっていくと思います。最後に、私に留学の機会を与えサポートくださった大学の方々や先生、家族、友人に心から感謝しています。留学で学び得たことを、お世話になった皆様や社会に還元できるように努力していきたいです。



マンチェスター大学交換留学記

文教育学部 言語文化学科
グローバル文化学環 3年
柿平恵理

皆さん、こんにちは。私は、大学2年の9月から10ヵ月間、イギリス・マンチェスター大学での交換留学を経験しました。私にとってこの10ヵ月間は長いようで短くもあり、後悔や苦労と同時に多くの新鮮な経験と出会いに溢れた日々でした。

〈マンチェスターの魅力〉

産業革命で有名なマンチェスターはイギリスの北部に位置し、イギリス第三の都市とも言われるほど非常に発展した都市です。ロンドンへは電車で2時間、国際空港もあるアクセスの良い便利な街です。私が一番魅力に感じているのは、その多文化な環境です。アジア、中東、様々な文化的背景を持つ人々が集まり共生しており、自分が文化的マイノリティであるという事を感じさせないような居心地の良さがあります。

〈大学生活〉

私は専攻分野に限らず Sociology、Language course、Japanese studies など興味のある授業を様々な組み合わせ受講しました。基本的にはどの授業も Lecture（講義形式）と Tutorial（少人数制のゼミ形式）の二つからなっています。私は特に日本を外から見つめ勉強し直したいという思いから日本語学科の開講する日本の宗教に関する授業を受講しましたが、現地学生の視点や学問領域としての日本社会・文化を学べたことで、改めて自分のアイデンティティを見直す貴重な経験が出来たと感じています。

〈マンチェスターでの生活〉

私は他のお茶大留学生二人と一緒に100人ほどの小さな女子寮に住んでいました。そこがイギリスである以上多少の問題はあったものの（笑）、こじんまりした寮での生活はとてもアットホームで快適だったように思います。食事付きの寮だったため、毎日の明るく親切な友人に囲まれての食事が楽しみでした。シンガポール・インド・イギリス・中国・スロバキア・バングラデシュ…多様なバックグラウンドを持つ友人たちとミュージカルを見に出かけたり、遊園地、誕生日パーティ…いつも笑いに溢れ様々な形で交流できたことが何よりも大切に貴重な思

い出です。また、ヨーロッパ各国を旅行できることも大きな魅力です。留学時は旅行に明け暮れて遊んでばかりいる自分が不安になったりもしましたが、思い切り楽しむまたとない機会だったと、今では自慢の経験です。



（↑寮の仲良しメンバーと寮の前で撮った一枚！）

もちろん苦しいこともありました。マンチェスターの比較的寒く雨がちな気候柄、体調を崩すことも多く、日本からの常備薬一通り、冷えピタなど忘れないことをお勧めしたいです。またイギリス留学の辛い点はその9時間という大きな日本との時差です。日本の友人や家族と距離感を覚え寂しい時間もたくさんありました。ですがそれ以上に、助け合える仲間に出会っていた素敵な時間があつたからこそ、頑張れたような気がします。

苦しいことも多かった中で、今振り返るとマンチェスターは、日本にいたのでは気付かないような日本の素晴らしさ、自分のアイデンティティを改めて見つめ直す素晴らしい機会を与えてくれました。この10ヵ月の経験が、自分の中で一生活きると確信しています。

WHAT

イギリス・マンチェスター大学

文教育学部 言語文化学科
グローバル文化学環 3年
馬淵茉衣

大学一年生の秋。留学に関心はあったものの、これと
いって勉強したいことがなかった私は、留学に踏み切れ
ませんでした。自分の無計画さに辟易し、「留学目的を明
確にさせる」と決意。一年間の紆余曲折の末、観光人類
学を勉強するという目的にたどり着いた私でしたが、語
学力不足を理由に観光学の履修を断られてしまいます。
留学の意義を一瞬見失いかけたものの、「もう後には戻れ
ない」「ならば地理学など興味のあるものを何でも学ん
でやろう」と気持ちを切り替え、最終的に留学を決心しま
した。



前期は、人文地理学、ビジネス人類学、地方環境マネ
ジメント学など多種多様な授業を履修しました。特に興
味深かったのがビジネス人類学で、例えば「なぜ日本で
ハイテクトイレが普及しているか」を生活文化や価値観
といった人類学的な視点から分析し、マーケティングに
応用する手法を学びました。後期は、前期とは反対にイ
ギリスの人種主義という社会学系統に特化して授業を受
けました。これは、マンチェスターで知り合った友人が
民族的・社会的に様々なバックグラウンドを持っており、
多文化共生への関心が高まったことが背景にあります。
社会学の勉強は想像以上にハードで、毎週課せられる大
量のリーディングは本当に辛かったです。読み込んでい
ない場合は全く議論に参加できない上に、読み込んだ度
合別にグループ分けされることもあり、勉強に対する自
分の甘い認識を痛感しました。本を読んでもろくに理解
できない・議論に参加できない自分が情けなく、先生に

「授業に全くついていけない」と泣きつくこともありま
した。すると先生は笑いながら「なんだ、もっと早く言
ってくればよかったのに」と答え、何がどう理解でき
ていないのかという思考の整理から、留学上のお悩み相
談まで親身になって話を聞いてくれました。20年も生き
てきて泣きつくなんて、今振り返ってみると子どもっぽ
くて恥ずかしいですが、この経験から現状打開のため
には、「自分から声を上げなければいけない」「無理と投げ
出さずに、とりあえず交渉してみる」というシンプルな
答えに気が付くことができました。落ちこぼれの私を見
捨てずに、励まし、アドバイスをくれた先生にとっても感
謝しています。

このように失意から始まった私の留学は、履修した授
業は分野がバラバラで「これを学び深めてきました！」
と自信を持って言えるようなものではありませんが、
様々な学問領域におけるイギリス式のアプローチに触れ
ることができ、とても有意義でした。いつかこれらの辛
かった・恥ずかしかったという経験が笑い話になるくら
い、広くアンテナを張って、モノゴトに果敢に挑戦し続
けていきたいと思います。最後になりますが、私の留学
を支えてくれたすべての人に深く感謝し、本文を締めさ
せていただきます。

イギリス・ロンドン大学

文教学部 言語文化学科
グローバル文化学環
笠 智遥



1. Study in London

My academic life in SOAS started from the beginning of August, 2013. Firstly, I was in a pre-sessional course which aimed to improve academic English skills such as writing essays, discussing in a small group, and giving presentations academically. The days of learning new academic style made me encourage to think more logically and to use English as a tool of my study.

After that, first term began at the last week of September. Fortunately, exchange students can take courses from different faculties/departments though there is some restriction about them. Thus I registered four courses which based on my interests. Three of them were about the Middle East (politics, art, and language) and the other was about militarism on Japanese TV. The most difficult one for me was politics because of lack knowledge of that field and I underwent failure of this course but I enjoyed the rest of the courses. Especially, learning new language broadened my mind. Arabic language has completely different features of writing and speaking so they really confused me at the beginning. However, after I acquired Arabic letters and some patterns, I found every Arabic word made sense and my interest in the language has deepened.

Through my academic life of three terms, the only thing I can say is that taking every course in English

or other languages is not as easy as studying them in your mother tongue; however, the experience would be worth to make an effort.

2. Life in the capital city

Undoubtedly, London is one of the most powerful cities in the world and the place is full of diversity. Though English is an official language in England, you might hear what you have never heard in a certain street. My first impression was the varieties of people there. Honestly, when I arrived at London for the first time, I was surprised and perplexed by them. I always thought how I could be friends with them or how I could adjust London's living environment. However, it turned out to be not hard as I imagined and it did not take a long time to be a good friend with others because I noticed that a person was just a person with each individual not nationality or ethnicity.

Another concern about living in a foreign country will be food. I was also worried about the diet in UK and I got over it by cooking for myself. In the case of London, there are numbers of grocer shops which sell Japanese food and seasonings. Thus I always enjoyed the taste of my home country.



WHAT

交換留学報告レポート

大学院人間文化創成科学研究科
比較社会文化学専攻
歴史文化学コース
加藤絵里子

【留学で学んだこと】

- ・文化や習慣は違うだけなので何がどう違うのかを考えることがいわゆる異文化交流なのではないかと思った。また楽しみながら体得するというのが大事であり、語学は決して得意ではない私も、現地での生活は英語そのものの持つリズムに身体で触れることができた。散歩や買い物の時ですら英語を聞き英語を話すので、焦らずに少しずつ楽しんで身に付けられるのだとわかったことも、自身の語学学習にとって良かった。
- ・広い視野を持とうと努めることで、文化の相違点が何かに触れることができた。研究面では、自身の専門の日本近代史の日本におけるアプローチ法ではない研究法を学ぶことができた。

- ・目標や計画を明確にしておく。東京と生活条件はさほど変わらなくても言語や生活様式が初めての環境の場合には、有効的な時間の過ごし方を見つけることも大事。授業、課題、友人、趣味・気分転換・休息。
- ・勉強すればするほど自身がどれほど知らないことだらけかと、自分が小さく感じられ、そうした日々を貴重と思うことができた。また、東京よりも国際化が進んでいるロンドンでは、これぞイギリスと思える場があれば、多文化を感じる場があり発見も多かった。

【院生としての留学・SOASの利点】

- ・研究テーマを深められる、発展させられる好機である。同分野においても国によって研究手法や観点の違いを見つけることができる。また類似の研究分野の人と話す機会もあり興味深かった。授業〔lecture / discussion〕やエッセイの他、自分の研究の一次史料収集や二次文献を読むことができ、有益だった。
- ・多くの国からの留学生が多く、学べる範囲も様々。大英図書館や大英博物館が近く、隣には Senate House という大きな図書館もある。



トルコ留学（アンカラ大学）

文教育・言語文化・日本語日本文学コース
3年後期～4年前期
福永桃子

留学の目的：日本語教師としての経験を活かすとともに、海外での日本語教育の現場から日本語教育についての見識を深める



自分の教え子がトルコ料理シシ・ケバブをご馳走してくれました

渡航前

- ・準備を進めるにおいて、アンカラ大の担当者となかなか連絡がとれず困った。メールの返信はかなり遅い
- ・ビザは簡単にすぐ取れる
- ・入国日に空港までの迎え等はないので友人に手伝ってもらった。（向こうで英語を話せる人はそんなに多くない）
- ・入寮予定の寮が工事中とのこと、事前連絡もなしにたらい回しにされた（友人のおかげでなんとか助かった）

トルコでの生活

- ・滞在許可証 *ikamet* を取るのがかなり困難。寒い日に早朝3時から並ぶ人もざら。私は友人のおかげで特別待遇ですぐとれた。
- ・交換留学生は無料で語学学校 *Tomer* に通学できる。基本的にはトルコ語を勉強することになる
→朝が早いことと自分の目的には合わなかったため、トルコ語は独学し日本語のクラスで自分は教える側

として通った

- ・寮はアンカラの *DISKAPI* という場所のキャンパス内にある。3人部屋。無料であり設備的には問題ない。ただ多国籍であることでの問題は少々ある（韓国人が台所を汚すことや夜中に大声で歌う人、共用のものを使い方など）
→私は不運にも日本人ルームメイトとの相性が悪く毎日ストレスだった。また、寮周辺は治安が悪く身の危険を感じることも何度かあった。どこに行くにも基本バス移動になるが、寮のすぐ目の前にバス停があるのはよかった。
- ・自分の専攻のキャンパスは寮のキャンパスとは別にある。
→寮からバスで10分程度、街の中心の近くだが同時にあまり治安がいい場所とも言えない
- ・物価は安く、だいたい日本の2/3～1/2程度

次に留学する人へ一言

- ・外大は先輩後輩で情報がしっかり行き渡ってるのに対してうちの大学はそういうことがなく、知らないことばかり＋トルコ語もできないだと詰む。トルコ人の友人を渡航前からたくさん作っておくべき。
- ・トルコではやり場のない怒りやストレスが溜まると思う。覚悟して行ってほしい。

WHAT

ケルン大学

文教育学部 言語文化学科
日本語・日本文学コース
田代恵理子

「海外の日本研究を知る」「ドイツ語の力を伸ばす」というのが私の留学における目標でした。お茶大で学ぶ中で、日本の文化が海外の文化に影響を与えていることを知り、今海外で日本はどのように捉えられているのか、ということに興味を持ったのです。第二外国語として習っていたドイツ語を伸ばしたいという理由で、留学先の国はドイツを選び、日本学科のあるケルン大学への留学を決めました。

ケルン大学での勉強はとても充実したものとなりました。日本学に関しては、冬学期は日本学基礎の講義と江戸文化史のゼミを履修しました。講義は毎回異なるテーマ（歴史・芸能・サブカルチャーなど）で日本について学ぶ授業で、日本学においてどのような基礎的知識が必要か知ることができました。ゼミでは学生の発表や議論を通して、ドイツ人が日本についてどのように捉えているのかが分かりました。また、松尾芭蕉の『奥の細道』についてドイツ語でレポートを書くことにも挑戦できました。夏学期は日本での専攻から離れて、日本の社会についてのゼミを履修しました。そのゼミは過疎や捕鯨問題など、現代の日本社会が抱えている問題について学生が発表し、議論するというものでした。私は香川県の来栖という地域に関するケーススタディをテーマにドイツ語で発表しました。

もう一つの目標であるドイツ語の力を伸ばすことも、留学生向けのドイツ語コースで勉強することで達成できました。各国から来た留学生は皆意識が高く、先生も熱意を持って教えてくれたので、とても良い環境で総合的にドイツ語の力をつけることができました。

学外でも、新しい経験をたくさんすることができました。ドイツでは多くの学生が親元を離れて寮で生活しており、友達の家集まって一緒に料理を作って食べるということが日常的に行われています。私も、他大学から来た日本人留学生やドイツ人学生の友達の家によく行って、巻き寿司や天ぷら、お好み焼きなどの日本料理と一緒に作りました。

留学中、旅行もたくさんできました。ドイツを含めると合計8カ国を旅行し、その国・都市の特色を肌で感じたり、現地の人たちと交流したりといった経験は、他国・他都市へのアクセスが良いケルンに留学したからこそ実

現できたことだと思っています。

生まれ育った場所を離れ、全く新しい環境で0から生活するという事は、想像以上に大変なものでした。将来自分がやりたいことや、周りの人たちとの付き合い方などが分からなくなって悩んだこともありました。しかし、留学生活にはそういった悩みに対してじっくり考えられる十分な時間がありました。それが正解かどうかは分かりませんが、それらの悩みに対する一定の結論を留学中に出せたことで、これからどんなことがあっても、自信を持って生きていけそうな気がしています。留学の機会を与えてくださったお茶大・ケルン大学の皆さま、そして私の家族には本当に感謝しています。ありがとうございました。



カレル大学（チェコ・プラハ）

文教育学部 人間社会科学科
グローバル文化学環 3年
加藤紗妃

プラハに留学していた、と言うと「いいなー」とよく言われます。きっと旅行パンフレットなどでよく見る光景を思い浮かべてそう言われるのだと思うのですが、ご想像通り、いや想像以上の素敵な街で過ごした9か月間は今になってみれば夢のような時間でした。

留学当初、一番よく聞かれたのは「なんでチェコ？」でした。大学入学後、「東アジア共同体」と「マイノリティ」の2つ柱に興味を持った私は、日本や近隣諸国だけに目を向けていては視野が狭くなると思い、1年の秋、留学を決意しました。共同体として一歩先を行くEUは、主導権を握っていない小さい国からはどう見えているのか、またその中に住むマイノリティはどんな暮らしをしているのか。これらを学びたいと思い、チェコを選びました。

プラハでの生活は大変なことだらけでした。寮のおばさんがチェコ語しか使えず、部屋が2人部屋の割に狭くてプライバシーも保てず、バスルームは男女共用。最初はルームメイトと、「どうやって暮らそう」「いつ引っ越そう」という話ばかりしていました。しかし住んでいると同じ階の留学生たちと仲良くなり、だんだんと居心地が良くなって、結局一番長く住んでいました。旧共産圏の洗礼を受けたことも度々ありました。郵便物を受け取るための書類がチェコ語だけだったり、ビザの手続きが煩雑すぎて挫折したり。そのたびに友達のチェコ人、もしくは友達じゃなくても英語ができそうなそのへんの若者を捕まえて、どうにか解決してきました。

授業もいろいろと苦勞しました。特にマスターの授業はディスカッションについていけず、あまりのわからなさに、部屋で泣きながらケーキをやけ食いしたこともありました。

問題は山積みでしたが、一つ一つ解決していくしか方法がないと思い、リーディングの量を増やし、専門単語を覚え、発言する機会を増やし、少しずつ授業に参加できるようになっていきました。今当時の日記を見ると、毎日何かに悩み、問題を抱え、誰かに相談しながら一つずつ解決していった自分がそこにて、我ながらよく頑張ったなあと思います。

普段の生活は、かなり楽しんでいました。学割で破格の値段でチケットが買えるので、毎週オペラを見に行っ

たり、オーケストラを聴きに行きました。また、毎月外国へ旅行をしていました。といってもチェコはヨーロッパの「真ん中」なので外国といってもバスで安く行くことができました。音楽好き、世界史好きとしてたまらない1年でした。

留学に行って良かったと思うことは、帰国後の勉強がより楽しくなったことです。学ぶことを自分の経験と結び付けて考えられることが多くなったので、以前より幅広いことに興味を持ち、面白いと思うようになりました。

当時は日々の生活にいっぱいいっぱいでしたが、振り返ると貴重な経験をたくさんしていたんだということに気づきます。この留学で身に着けた語学力と勇気と行動力と生命力を生かし、今後の人生も楽しみたいと思います。



WHAT

フィンランド・セントリア先端科学大学

理学部 情報科学科
劉 月晴

フィンランドに行く前に向こうで友達ができるか、英語話せるようになるかなどの不安の気持ちでいっぱいでした。向こうに着いて最初の1ヶ月間はあまりヨーロッパの学生たちと話すチャンスがなく、学校での授業もよくわからなくて、またフィンランドは10月から冬に入り、極夜にもなり、暗くて寒い環境の中で、焦りと苦しさをひどく感じ、家族とスカイプをする時に泣きました。それから、家族に旅行でも行って気分展開してみればと助言され、初めて台湾の友達と二人で旅行を計画しドイツに行きました。そこで外国の文化、美しい風景と出会い、自分をもっと頑張っでここで生きていくと決心をしました。ドイツから戻ってから、私は積極的に学校の活動に参加するようになりました。交換留学生は全部寮に住んでいるため、暇なときに友達の家遊びに行ったり、食事会をしたり、3ヶ月間で英語がほぼ無理なく話せるようになりました。学校では先生や同じクラスの学生たちと普通に話せるようになり、英語を強化するために取ったライティングの授業でもいい点数を納めました。またヨーロッパ人の友達がたくさんきて、12月に私の誕生日パーティーや4月に私のラストパーティーまで開いてくれて、とても幸せでした。こんなふうに世界各国の友達ができるチャンスは一生に一度しかないと思います。

セントリア大学の活動が豊かで、その中でも森で一泊キャンプをするのがとても印象に残りました。フィンランドは約三分の二が森のため、夜になると星空がとてもきれいに見えます。特に先生が私たちを森の深くまで案内してくださって、流れ星まではっきりと見られて、本当に最高の夜でした。

今回の交換留学で得たものといえば、二つあります。まずは自信です。英語を話すことを考えるだけで怯えてしまう私は今では普通に英語で話すことができるようになって、また学校の授業でたまたまプレゼンテーションをするため、その力も身につけました。次は自立です。フィンランドでの生活はもちろん、暇さえあればヨーロッパ圏の旅行をしてきたため、自分で物事を処理する力が付きました。最後は好奇心です。旅行をしていくと、自分はまだまだ知らない世界はこんなにあって、今まで自分の無知に気づき、生活への態度がとても前向きになりました。

フィンランドのセントリア先端科学大学での留学は私

の人生のあらゆる面にとってとても貴重な体験をしたと思います。



フィンランド タンペレ大学

言語文化学科 英語圏言語文化コース 猿田静木

留学する前も留学した後も、私がよく聞かれる質問として「なぜフィンランドを選んだか」が挙げられます。英文学を専攻している私がイギリスやアメリカを選ばず、フィンランドを選んだ最も大きな理由は「普段全く触れる機会のない第二言語を母語以外の言葉で習う」という体験をしたかったからです。副専攻として日本語教育も勉強していたので、日本語で日本語を学ぶ学習者の気持ちを理解する必要があるとかねてより感じていました。治安がよく、公衆衛生も整っているフィンランドは、公用語であるフィンランド語の前知識が全くない私にとって、とても丁度良い国でした。

結果として、フィンランドで過ごした10ヶ月間は私に与えてくれたものは期待以上でした。まず言語は、フィンランド語を英語で習う授業を継続して取り、どれほど母語を介さない言語習得が大変なものかということを経験しました。更に言語教育で成功しているフィンランドは、みんなネイティブのような英語を使い、普段の生活は英語を使うことで英語の会話能力も磨かれました。次に、様々な人々との出会いがありました。タンペレ大学はとても留学生に開かれた大学だったため、アジアからアフリカまで実に多様な人々がおおり、そうした人々との触れあいは世界中の国々それぞれに愛着を沸かせました。またフィンランドの大学は学生の年齢が実に幅広く、そういった様々な世代との関わりも私に大きな影響を与えたと思います。



とりわけフィンランドでたくさんの日本語学習者とたくさん知り合えたことは、私にとって大きな財産の一つです。日本語のランゲージグループを作ったことで、フィンランドだけでなく様々な国の学習者に日本語や日本文化を教える機会に恵まれました。

森と湖に囲まれた環境の中、フィンランド式パーティーでお茶を飲みながらゆっくり話をする時間は、本当にかげがえのない時間だったと思います。国も人種も育った環境も違うのに、表面的なものではなく自分の価値観や思いについて話せる友人を得られたことは、一生の宝物になるのではないかと感じました。

私は春から日本語教育をより深く学ぶために大学院に進学します。その決断もフィンランドで経験したことや、たくさんの人々との関係が大きく関わっていることは明らかでしょう。留学は私にとって大きな転機となりました。今現在東京で忙しく生活していると、あの留學生活は夢のようだったなあと思いますが、それでも確かに価値観は変わり、視野が広がったと実感する機会は多いです。自分の中に、留学で培ったものは確かに息づいていてと感じました。

WHAT

アメリカ・ヴァッサーカレッジ

人間文化創成科学研究科 ライフサイエンス専攻
人間・環境科学コース 博士後期課程
小野亜美

The introduction part is a rather difficult part for me in writing essays; starting with general to specific, the very basic strategy to make readers understand. Here, I am still struggling to start writing since my head is packed with so many memories of what I experienced during my stay in Vassar College, for 9 months. I feel so hard to pick one and tell, but before I start looking back what I learned from classes, my extra curricular activity, my part time job and others, first of all, I would like to acknowledge to my parents, my professor, my friends and people I came to know in America. They supported me before and during the program, and even after I came back to Japan. It was such a great opportunity to enroll in a foreign college and spend my time there. I cannot imagine a life without them and cannot appreciate more.

9 month seems so long just looking at the number but too short to realize all of the things that I wanted. However, I believe this stay gave me a new perspective to see myself and things in the world. I am not 100% confident about how I write and how I think, but this experience also encourages me to interact with people by utilizing what I have now, in terms of my linguistic ability, and try to present my opinion without hesitation. (Of course I failed so many times but also learned giving up is much worse.) To be honest, I don't think I was enjoying the moment while I was taking the classes or preparing for the classes or doing all assignments, but now I am relieved and kind of enjoying recollecting those days. The other good thing to study at Vassar was that I could get a company, was a great help just be with them since I could push myself to do my assignments or readings. There were people who were always with me in the library, since they were also struggling with those works.

The most enjoyable part of my Vassar life was joining the swim team. The time I spent with them was so precious. The swim team there was famous for being close, *i.e.*, having a team dinner at the campus dining once a week. I heard about this on my way to Vassar from JFK airport. They were hard workers, which inspired me to try to work harder on what I had to do. I usually didn't go out of Vassar and travel in the U.S. during weekends, even during the long vacations. Instead, I went for swimming practice. I felt I was mentally balanced and those days made me even healthier than I was in Japan because I had a lot of exercises, sleep and nutrition.

I got a part time job as a research assistant at Chinese and Japanese department. There were very few Japanese on Vassar campus and the department was in need of assistants who understand Japanese. I was lucky that I didn't need to spend a lot of time to

find a job there. On the other hand, it was quite difficult to find a job for Chinese students, since there were a lot of competitors according to my Chinese friend. It was fun teaching and talking with students who were interested in Japanese culture, since this job gave me time to rethink and discuss uniqueness of my own culture.

The advice I could say to students who are planning to study abroad in the future- get enough sleep, join some activities, and enjoy! I didn't become friends with a lot of people on campus but you can definitely find the one who is able to get along with. Last but not least, I urge students to get rid of wisdom teeth before going abroad, if they haven't gotten theirs yet. Mine started to ache in March and it was 2 months before the departure. I couldn't wait until I leave the USA so I decided to get an oral surgery, which cost me no less than \$700. Fortunately, I was on an insurance plan that covers it, some will be back. I'm not sure how much yet but will soon know. Thank you for your great patience for reading this!



Women's swim team



Dinner at one of the swimmer's house,
during the winter vacation

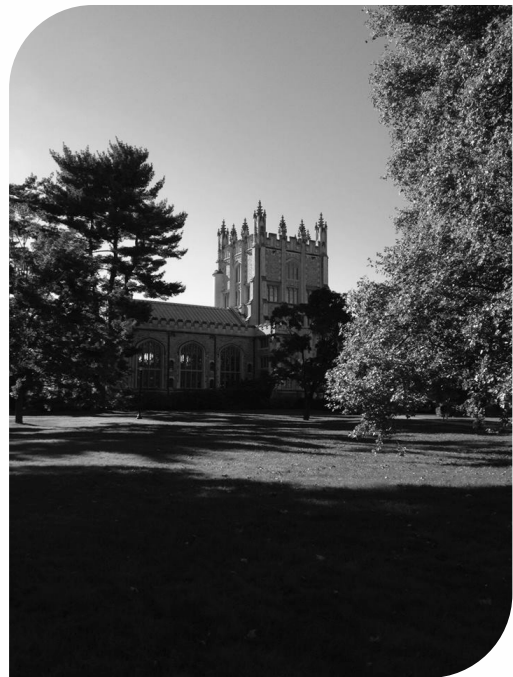
アメリカ・ヴァッサーカレッジ

生活科学部 人間生活学科
生活社会科学 3年
鈴木晴絵



私はアメリカのニューヨーク州にあるポキプシーという小さな町にある Vassar College に昨年の8月から4か月ほどお茶大から交換留学生として派遣させていただきました。Vassar College はリベラルアーツの学校なので、向こうで私は中国語、楽典、ドラマ、美術史、文学の授業を取って勉強をしました。「半期しかいないんだから興味のある授業は全部取ろう！」と食欲に取りたい授業を履修したのですが、現地の学生にも「それは多いよ」と言われてしまうくらい登録してしまい、却って自分の首を絞めることになりました。発展のゼミのクラスを二つも取ってしまったことは途中で大きなミスだと気づきましたが、「時すでに遅し」だったので、なんとか最後までやり遂げました。毎日夜の2時くらいまで勉強しても課題が終わらず、最後の一か月はテストやレポートで生活が乱れてしまい、ほとんど記憶がないくらいなのですが、向こうで出会った友人たちと励まし合い、助けてもらい乗り切ることができたと感じております。こう書いてしまうと、いかにも勉強しかしていなかったのような感じがしてしまうかもしれませんが、決してそんなことはありません。4か月の間にマンハッタンに5回くらい出かけ、ブロードウェイを観劇したり、美術館に行ったり、またボストンに遊びに行ったりなど休暇を有効活用して様々なところに出かけました。中でも忘れられない旅行はテクスギビングの休暇を利用して友人と行ったサラトガスプリングというニューヨーク州の小さな街です。特に有名な観光名所はないのですが、ショッピング

をしたり、ファーマーズマーケットに行ったりと、忙しい日々の中でゆったりとした時間を過ごすことができたのが忘れられません。一緒に出掛けた友人とは今でもよく連絡を取っており、夏には日本に遊びに来てくれる予定です。私自身も彼女の家遊びに行く予定で、Vassar College では本当に大切な友人を見つけることができました。このような素敵な機会を与えて下さり、本当にありがとうございました！



WHAT

南オレゴン大学

文教育学部 言語文化学科
グローバル文化学環
岩田明子

1期生として2013年9月から2014年6月までオレゴン州アシュランドの南オレゴン大学に派遣していただいた。私は留学を志すには呆れてしまうほど英語が苦手で、IELTSのスコアの関係上、低めにボーダーを出してくれていた本大学に何とか拾っていただいた感じである。そんなこんなで1年を過ごした南オレゴン大学、通称SOUだが、帰国した今、自信を持っておすすめする。

第一に強調しておきたいのは、アシュランドの人々は「私の思っていたアメリカ人と何か違う」と言いたくなるくらいに優しく穏やかである。エネルギーで個人主義な人がアメリカ人には多いとひそかに妄想して勝手に怯えていた自分だが、ここはオレゴン。しかも小さな観光地。ローカルでナチュラルな生活を愛する人々が集っている。主にお年寄りではあるが…。車の運転も都会より断然安全運転だし、渡りたそうにしていると止まってくれる。スーパーの店員さんも親切だ。猟銃もったおじさんがうろうろしていると考えていたらといううちの母親はアシュランドに来て想像との違いに驚き、安心していった。



友人とトランポリンパークに行った後の休憩時間
(2013年6月)

大学の人々も穏やかな人が多い。初めての授業の日は毎回授業後教授に挨拶に行っていたのだが、大概はとても協力的な人が多い。ごくたまに留学生に優しくない教授もいるらしいが、私はあたったことがない。課題でわからないことがあればすぐ質問してね、と言ってくれる。

学業面はもちろん大変だが、自分がこれくらい頑張れるんだということを確かできる良い機会だ。留学生同士助け合って深夜までエナジードリンクを注入してレポートを仕上げていたのも良い思い出である。寮も新しいから綺麗だし、食事もあることは否めないが結構おいしい。環境は落ち着いていてとても良いと思う。

加えて、アシュランドは小さいけれどとても可愛らしい町だ。歩き回るだけでも幸せだし、ちょっとしたディズニールンドみたいな気分になれる。アクティブなことをしたいときは友達に頼めば連れてってくれるだろう。飛行機代は高いがバスを駆使すれば旅行も楽しめる。ぜひ、候補に入れてみてほしい。

オーストラリア ニューサウスウェールズ大学

文教育学部 言語文化学科
グローバル文化学環 3年
新井佑理

留学生活は、小さな挑戦の連続で、それを支えてくれた人たちの温かさに救われる日々でした。思えば、「自分の殻に閉じこもってはいけない」と自分を奮い立たせていた当初。偶然出会った現地の学生達に半ば強引に自己紹介をし、最初の友人を得ました。初対面の私を快く受け入れ、生活のアドバイスをくれるなど親身な対応に嬉しさと安堵を覚え、自分からコミュニケーションをとる契機になりました。

授業が始まってみると、積極的なネイティブの学生たちに圧倒され、また英語力の不足から緊張と不安の毎日が続きましたが、授業の内容はどれも興味深いものでした。特にアジア諸国の政治・軍事問題等について、時に当事国出身の学生の主張を交えながら行われるチュートリアルは刺激的で、この分野への関心が広がりました。また、多文化主義概念の否定的側面を諸国・諸宗教における事例をみながら分析していくという授業では、かねてから興味のあった「異なる価値観や伝統を持った人々の共生」について、多角的に考察する機会となりました。なかなか積極的に発言できなかった場面もありましたが、心優しい友人達と協力し、クラスで1位となったグループプレゼン等、満足の得られた思い出も多々あります。

授業以外では、フラットメイトと過ごした時間が多く思い出されます。6人のフラットメイトとは、どんなことも腹を割って話せる仲になり、第二の家族のようなものでした。明け方近くまで日中韓出身の3人で島問題、歴史認識の差、各国の現状などひたすら話し続けたこともありました。また、「あなたのためだから」と英語も頻繁に直してもらい、そのおかげで、拙い英語でも積極的に話せるようになりました。もちろん、育ってきた環境も価値観も異なる者同士、共有スペースの使い方にもその差は表れます。そんな時も、互いに正直な意見を交わせたことは自信になりました。長期休業には、自治体国際化協会シドニー事務所でインターンを経験し、姉妹都市プログラムや日本の観光PRの現場を支える全国各地からの自治体職員と関わりをもつことができました。魅力的な先輩方に出会い、将来の働き方を考える上でも大変参考になりました。帰国前には、同じくインターン生であるベトナム系オーストラリア人の学生の家ホームステイ

をする機会を得ました。アジア系の人々が多く住む郊外の住宅地にある、ベトナム語と英語が行き交う家庭で、移民やその子孫の暮らしを窺い知ることができました。

9か月間の留学を通して、文化や宗教を越えた人間関係を築く機会に恵まれ、多文化共生が私の中で大きなテーマとなりました。多くの経験と友情にあふれた留学生活をおくれたことに、感謝いたします。



WHAT

University of New South Wales

文教育学部 人間社会科学科
教育科学コース
石丸稚菜

《留学生生活全般について》

9ヶ月間キャンパス内の寮で友人との共同生活を送った。朝晩ダイニングホールでみんなと食事をし、スタディスペースで勉強をする中で、自然と友達を増やしていくことができた。寮には交換留学生やインターナショナルの学生も多く、本当に多岐にわたるバックグラウンドを持つ友人と生活を送ることになった。男女共用のバスルームやパーティ好きの友人たちの振る舞いに最初は戸惑うこともあったが、とても気さくな友達に恵まれ、悩みも相談しつつ、毎日楽しく生活をしていくことができた。大学の授業以外の時間は、寮内で課題やリーディングを進めたり、友達と話し込んだり、また所属していた大学オーケストラのための練習を行ったりして過ごした。寮内の音楽室で友達と一緒にピアノやチェロを演奏したり、一緒に歌ったりすることも多く、英語がうまく出てこなかった最初の頃に、音楽に救われた思いをしていたことを今も覚えている。一学期目は休みの日も課題に追われていることが多かったが、二学期目には仲の良い友達と外に遊びに行ったりランチに行ったりする頻度

も増やすことができ、また日本語教育のボランティアにも挑戦した。日本語教育で出会った仲間たちや、クラスで同じグループとして活動する友達とのつながりもでき、寮の外の友達の輪も広がっていくことができた。

《学業について》

リーディング、ライティングに慣れるまで課題一つひとつをこなしていくのに非常に時間がかかったが、予習を行い、レクチャーノートを有効活用しつつ、また自分が書いたエッセイを友達に読んでもらい指摘をもらう、ということを繰り返していくうちに、少しずつ効率よく授業をこなしていくことができるようになったと思う。

専門分野に関して、教育心理学、教育評価、ICT教育、ESL教育、日本語教育を履修し、より深い学びを経験できたと考えている。オーストラリアの教育では、学習者が授業に積極的に参加すること、生徒同士の学び合いがとても大事にされており、日本の教育を見直す上で、非常に得るものが大きかった。日本語教育では、教育実習として現地の大学生に対して授業をさせてもらう機会を得た。「学習者にとって必要なスキルを身に付けるために、どう言語学習のファシリテーターとなるか」ということを常に考えて取り組み、その難しさを身をもって体験すると同時に、今後自分が教師を目指すにあたっての、目標像を描くことができた。



オーストラリア・ ニューサウスウェールズ大学

文教育学部 人間社会科学科
グローバル文化学環
牛留早亜彩

小学生の頃からアメリカ出身の先生から海外の話を開き、中学のときにマイアミで大学を見てから、私の将来の夢は留学して海外の大学に通うことでした。進学先を決めるときもまずは留学の支援が手厚い、次に勉強したいことができるところの順番で選んだのがお茶大でした。そのこともあって、入学式の週には留学相談に行き、1年の夏にイギリスに語学留学、秋に試験を受けて、1年の冬には UNSW に留学することが決まりました。正直そこまでの手順があまりにとんとん進んでしまったため、1年の冬にはあまり実感がわきませんでした。留学について悩み出したのは出発までの1年でした。本来ならば夏出発のところ、オーストラリアは大学スタートが2月だったため、出発まで1年の猶予期間がありました。1年間留学を見据えて大学の授業を受けていくうちに、勉学の興味関心に少しずつずれが生じ、UNSW に本当に留学していいのか、もう一度やり直して別の大学を受けたほうがいいのではないかなどと悩みました。ただ UNSW にも開発学の授業があり、またオーストラリアならば様々な国籍の人から意見が聞けるのではないかという発想を元になんとか気持ちを立て直し留学生生活をスタートさせました。

UNSW は留学生にとって最高の環境でした。まずは多国籍なこと。確かに日本人はどちらかというとマイノリティですが、他にも多くのバックグラウンドを持つ生徒がいてあまりそれを感じることなく過ごせました。授業前のプレセッションがなく、着いていきなり授業！というのはきつかったですが、英語プレゼン、エッセイの書き方の授業があり、それを取ることで補うことができました。エッセイの書き方は日本とは全く違ったのでとても役に立ちました。一番楽しみにしていた開発学の授業も、周りに全く日本人がいない中やっていけるか不安でしたが、全員の前で発表というのはなかなかできなかったものの、グループ内では自分が日本人だということを踏まえたうえで発言をすることもできるようになりました。授業形態は大人数で受けるレクチャー、10～20人の小グループでフィードバックを行うチュートリアルという2層構造で、1つの科目について深く理解できるものでした。UNSW には留学生専用の授業はなく、ロー

カルもインターナショナルの生徒もごちゃまぜで授業を受けていますが、それもととても刺激的で、特に開発学を専攻する生徒は半数が元々途上国に住んでいた、もしくはボランティアなどで滞在していたことがある生徒で、現地の声を聞くことができたのも日本との大きな違いでした。

1年間の留学生活で、たくさんのいい出会いもありました。Nippon Student Association という日本が好きな生徒のサークルでできた友人と海に行ったり、シドニー大学など他大学の友人も作る事ができました。私に携わってくれる全ての人が親切で、自分自身も忙しくて忘れていた誕生日にたくさんご飯を作ってお祝いしてくれたり、後半インフルエンザ、扁桃炎と体調不良に悩まされ続けた時期も、授業のノートを見せてくれたり、お見舞いに行くよ、一緒に病院に行くよと気にかけてくれたりと、周りに本当に助けられた1年間でした。私の留学生活がこんなにも充実して、今も海外にインターンなどに行けているのは、このときの友人はもちろん、毎回私の意志を尊重してくれた家族、そして留学スタート前、留学中にお世話になった大学の先生方のおかげです。これからもその感謝を忘れずに今後の活動に生かしていこうと思います。



WHAT

モナシュ大学

理学部 生物学科
奈良香織

「挑戦」、これほど端的に私の留学経験をあらわしている言葉はないだろう。

それは留学中に経験したすべてのことが自分にとって新しい挑戦であり、白紙からのスタートであったからだ。友達もいない、日本語は通じない、英語のレポートの書き方も分からない…そんなゼロの状態から出発した私には当初恐怖と不安しかなく、つらい思いをすることも多々あった。しかし、何事も初めてだったからこそやりがい生まれ、それをやり遂げた時の達成感は今までに味わったことのないほど大きなものだった。この一年間で積んだ様々な経験は、自分のものの見方を大きく変え、今後の進路選択にも影響を及ぼすのだろうと思う。一年間の留学をするというとても大きな決断に踏み切ったことを本当によかったと思うし、この留学をサポートしてくれたみなさんに感謝したい。

留学をして感じたことは山ほどあるが、その中でも強く感じたことを2つ挙げたいと思う。一つ目は勉強に対する姿勢の違いである。オーストラリアの大学のカリキュラムは日本のそれとは大きく異なっており、少ない科目数を深く掘り下げて学ぶというものであった。授業形式は講義のみではなく、チュートリアルや実習もあり、その中でグループワークやプレゼンテーションをすることもあった。レポート課題では、たくさんの文献を読むことが求められ、生徒の学習に対する能動性や自主性の高さに衝撃を受けた。このような新しい学習環境の中で過ごした日々は、私は今まで自分がしてきた勉強方法や、受けてきた教育について見つめる良い機会になった。日本に戻った今、オーストラリアで学んだ能動的な学習姿勢を今後の勉学に活かしていきたいと思う。

二つ目は、視野についてである。友達が‘Being in a different country expands the view of your vision’と言っていたのが非常に印象に残っているが、本当にその通りであることを身にしみて感じた。日本にいる時と比べ、自分でも驚く程はるかに多くのことを感じとったり、見つめたりすることができた。これは慣れ親しんだ国を出たことで、その国にある既成概念や先入観、常識といったものから開放されたからだろうと思う。自分や日本について、また将来について今までと全く違う視点で考えられたのは、留学することの大きなメリットの一つだと感じた。

この一年がこれほど充実していたのは、常に新しいことに挑戦できる場と挑戦したいという気持ちがあったからである。そしてこの精神を支えていたのは、オーストラリアに一年しかいられないというタイムプレッシャーだった。古巣に戻ってきた今、新しいことばかりに身をおける環境にはもちろんない。むしろ、周りにはもう慣れていることばかりで溢れている。しかし、だからといって全く何もできないわけではない。求める気持ちがあれ

ば、自分を高めてくれる新たな場を探することができるのだと思う。卒業まで一年半。これからまた新たな挑戦が始まる。



テニスで知り合った仲間たちと

アーツセンターで催された日本のイベントにて



ダーウィンで旅行中に会った人たちと



メルボルンの日本語補習校の子どもたちと

ニュージーランド オタゴ大学

文教育学部 言語文化学科
英語圏言語文化コース 3年
三上奈津美

南極も程近く、ニュージーランド・ダニーデンにあるオタゴ大学で約10ヶ月間の留学をさせていただきました。羊が数えられない名詞であるということに妙な納得を覚えるような風景が延々と繰り広げられるニュージーランドですが、私がこの国を留学先に選んだのは、自然が多いところに行きたい、のんびりした雰囲気が自分に合っていそうな気がする、といった理由からでした。もちろん専攻が英文学ということで、日本以外の国、できれば英語圏で学んでみたいと思ったからでもあります。しかし今になって思うことは、留学前に感じていた日々の閉塞感から私を解放してくれたのが、ニュージーランドという国で出会った人々と自然だったということであり、私にとっての最良の選択だったに違いないということです。

外から見て初めてその実態がわかる、とはよく言われることです。私がニュージーランドで感じた自由さ、人々の心のゆとりは、そのまま日本で感じる窮屈さの裏返しでもあるのに違いありません。大学生活後半には就職活動に追われ、駆け足で社会へと出て行く、そしてルールを外れない生き方が安全で幸せ。そのような考えをもう少し柔軟にしてくれたのは、留学を通して出会った多種多様の生き方、目標、夢を持っている友人との出会いでした。でもそれと同時に、彼らは私よりもずっと大きな情熱、行動力、そして明るさを持っているのでした。留学するという選択は、ある意味敷かれたルールを外れることでもあると思います。しかしその経験によって私は視野がずっと広がり、今後の人生も何だかもっとどんと構えて考え行動していけるような気がします。そのような人生についての話をしながら、大きな気持ちで友達とマウントクックの麓を歩いたのがいい思い出です。

また人々の親切さも、心にじんわりとくるものでした。異国人であり、言葉もままならない私に、天気がよければいい日だねと声をかけてくれる人がいて、目が合えば笑ってくれる。最初にダニーデン空港で途方に暮れていた私を、親切なおじさんがバスに乗せてくれ、運転手のおばさんが布団を取りに行くところまで手伝ってくれたことは特に印象に残っています。相手が誰であれ互いが幸せに一日一日を過ごすための心の余裕、それもニュージーランドで私が教わったことです。

学習面については、苦しかったことの方が多かったことは確かです。先生や他の生徒が言っていることが全てわかったならどんなに楽しいだろうかと悔しく思いながら、授業ではできるだけ存在感を消したいと思うばかりでした。挫折して意欲も何もなくなりましたこともありましたが、そこから立ち直りまた新たに楽しく過ごせるようになったことは自分が強くなれたという証であり自信となっています。また日本人である私が英文学を学んでいるということはよく不思議がられ、自分自身そのことの意義についてもよく考えさせられる経験でした。このようなかけがえのない経験をさせていただけたことに感謝しています。



WHAT

ニュージーランド・オタゴ大学

文教育学部 人文科学科
グローバル文化学環 3年
吉村 茜

留学先志望理由および目的

中学3年のときにニュージーランド短期留学をして以来、ニュージーランドの魅力に取り付かれもう1度戻りたい一心で交換留学に応募しました。今回の留学の目標は、ニュージーランドの先住民マオリに関する見聞を広めることと、交流の輪を広げることでした。

学習面

オタゴ大学で開講される各授業は週に2回50分の講義に加えて、チュートリアルから構成されていました。留学期間は主にマオリ研究 (Māori Studies) の講義を受けていきました。Waiata: Te Timatanga (Māori Performance) の授業では、課題曲のバックグラウンドのレクチャーだけでなく歌、踊り、ポイ (poi) を習い、学期末には査定も兼ねたコンサートを開きました。その授業では毎週、真っ暗闇の密室のなかでチューターの発声だけを頼りに曲のメロディーと歌詞を覚えしました。まったく明かりの灯らない暗室でマオリの歌謡は伝承されるといいます。そのシチュエーションに基づいて実際に課題曲を覚える作業は、他の授業にはない貴重な異文化体験でした。授業内で課される数々のエッセイに苦戦しましたが、メンターやフラットメイトたちにネイティブチェックをかけてもらいながら頑張りました。

生活面

フラットではアメリカ人3人、ニュージーランド人 (Kiwi Host)、日本人1人と一緒に暮らしました。男女かかわらずフラットメイト同士仲が良く、一緒に買い物に行ったりビーチへ繰り出したりしていました。週に1度持ち回りでフラットメイト全員に料理を振る舞うフラット・ディナーが楽しみでした。当番になれば皆本気で半日以上かけて自慢の料理を作っていました。

課外活動は Otago Dance Association と JCAL に所属していました。日本に興味のある学生と日本人をつなぐコミュニティが主催する Movie Night やキャンプなど日本ではなかなか参加しないことができてよかったです。そのほかオタゴ大学インターナショナルオフィスの留学推進プロジェクト PV 制作チームのプロジェクトリーダーを担当する機会を得ました。自らが企画提案から撮影するまでに至る様々な過程を進めるのもなかなかチャレンジングな体験でした。休日にはかつてのホストファミリーを尋ねたり、一人旅をしたり、新たにできた友人やその家族とともに時間を過ごしたりして、素敵なリフレッシュ期間になりました。



写真1 ホストファミリーとともに
〈Hobbiton, Matamata〉

国立台湾大学

文教育学部 人文科学科
比較歴史学コース 4年
須田春香

私は台湾の首都、台北にある、国立台湾大学に半年間留学していました。地下鉄にもバスにもアクセスしやすく、台北の中心部へは20分くらいで行くことのできる、交通の便の良いところに位置しています。国立台湾大学は台湾における最高峰の大学ですが、中国語圏でも指折りの大学らしく、中国にある北京大学や清華大学などと同列で語られる大学だそうです。実際に、正規生として香港や北京出身の人たちとも出会いました。また、留学生の受け入れ人数も多く、様々な国籍を持った留学生がいました。キャンパスは広大で、私の場合は校舎が偶々どれも同じゾーンにあったのですが、続けたコマで授業を受けるときには早足である必要があるほどでした。キャンパス内の主な交通手段は自転車で、私の周囲でも自転車を購入した人は多かったです。

大学での授業ですが、私は留学生向けの語学コースを取っていました。毎朝やっていて、メンバーも固定なのですぐに仲良くなれ、楽しく中国語の勉強ができました。その他には自分の専攻である歴史学、あとは台湾に関する留学生向けの授業を取りました。台湾の歴史についても学んだのですが、高校でやるような日本史と同じことを扱っていても観点が異なっており興味深かったです。授業によっては自分の語学レベル的に難しく、他の授業との兼ね合いのため途中で挫折して、聴講という形になってしまいましたものもありました。授業そのものはそこまで張り切ってとるというよりは一つ一つを丁寧にやろうという心構えだったので、数としては少なかったです。

学生寮ですが、大学から徒歩5分くらいのところで生活をしていました。一人部屋の冷蔵庫、トイレ・シャワーのついたところで広いスペースのところでした。キッチンには部屋には備え付けられていませんが、一階にラウンジがあり、そこで調理することができました。ただ、台湾は夜外食が一般的で、値段も作るより安かったのにより手料理が食べたいとき以外は買って済ませていました。一階のラウンジで食べていると大抵誰かが来て話し相手になってくれるので語学の勉強にもなりました。

学校外での活動になるのですが、台湾では第二外国語で一番日本語が選択されるらしく、日本人だと分かると言語交換に誘われました。私は基本的に二人の学生とそ

れぞれ固定で、毎週一緒にテキストを使って日本語、中国語の勉強をしていました。雑談の中で台湾では日本語の影響を受けた言い回しが多くあることを知りました。また、日本語を教えていくなかで自分の言語の構造を改めて考える切欠にもなったり、台湾で起きている出来事を直接聞いてみる機会になったりしたので良かったと思います。この二人と、その友人たちとは親密な付き合いをさせて頂き、今でも交流しています。

私がいた頃は政府に対する学生運動が活発だった時期で、それに対する生の意見も聞けました。また、「親日」と言われる台湾で過ごしてみてそれがどういうものかを肌で感じることができました。研究に直接的に役立つかは分りませんが確実に新たな見地を手に入れたと思います。



編集後記

異なる文化、社会、価値観、慣習において学ぶことは、それぞれがもつ将来のビジョン、課題、目標、憧れを昇華させることにつながり、自己のさらなる成長を導きます。2013 年度交換留学派遣生の報告書から読み取れる苦労、努力、向上心、挫折、喜び、自信、に着目すると「留学」の醍醐味的一端を知ることができます。長い人生を考えると、ほんの一時の経験かもしれませんが、留学の経験が無意識にも毎日の生活や学業に影響し、派遣生のみなさんがそれぞれのもつ能力をさらに発揮できるチャンスを自らが創造し、享受して、新しい時代を担う成熟した人材になっていくことを信じています。

(渡辺紀子)

発行日：2015年3月31日

発行：お茶の水女子大学グローバル教育センター

〒112-8610 東京都文京区大塚2-1-1

Tel/Fax：03-5978-5913

監修：戸谷陽子（グローバル教育センター長）

編集：渡辺紀子、長塚尚子（グローバル人材育成推進センター）

印刷・製本：よしみ工産株式会社

STUDY ABROAD
ANNUAL REPORT 2013
Experiencing the World



お茶の水女子大学
Ochanomizu University